

船団

第 114 号

特集

現代俳人論



平 きみえ

葉桜の向こうから来る晴れ男

四才と五才の間夏始む

ぽこんぽこレタスを積んで夕焼けて

完全な釘ですもうこれは蚯蚓です

若楓そうよ私のすわりだこ

まん中の滝見茶屋にもBランチ

私に餃子くらげにパスポート

高田 留美

春闘やコロツケは肉屋に限る

ジャンケンの最強はチューこどもの日

賀茂祭みじかい脚のぼくぼくと

内心の自由五月の風の中

踊子草ゆつさりアイヌの子守唄

乙女らは旅に出るはずさくらんぼ

殿は唄ってしまう蟻の列

● 会員作品 ●

タチオカ 帽子

人の世に浮くか鯨の目に青葉

海底の立夏明るし奈良京都

ニッポンノ口承ハ秋月ドウセウゾ

青嵐犯人いまだ捕まらず

胸元を鯛の唇過ぐ蟬丸忌

糸遊や擦れ違いたる死の二つ

春行くぞ病院仲間いま四人

谷 さやん

隣合わせに尻もちと桜貝

永き日の校長室の鹿の角

春コート裏は水玉模様なる

日本の貝ひらく音桜咲く

桜咲く吾に空色の肺二つ

似顔絵の夏目漱石豆ごはん

鯉幟夜の底方を知っている

千坂 希妙

山笑う漱石居士は笑わない

春やもん脱毛脱字脱原発

ちかごろは佐保姫も飲むハルシオン

春愁も卵でとじて酒のあて

桜散るそくそくと散るソクラテス

寝る猫に牙が覗くよ木下闇

原爆忌二度あることは三度ある

つじ あきこ

春愁といえばそうかもビードロ吹く

花真白背中で聞けばやさしいよ

チューリップこは笑って通りましょ

イロハニホ青いモミジの赤い羽根

いいことがきつと今年も守宮来る

あめんぼう単細胞にできてます

青嵐泣くのはいつも兄の方

● 会員作品 ●

辻江 けい

刀匠の反り確かむる春の雷

釣殿の逆さ全景水温む

老猿の沈思のポーズうららけし

草笛を吹けば応へり古墳山

生卵カレーライスに昭和の日

鳶の笛植田の中の散居村

一湾にとどろく太鼓夏祭

津田 このみ

花アカシヤ屈伸の夜の始まりぬ

冷奴縦横にある手術痕

アマリリス話せば遠くなる人よ

麦の秋おずおず傷に触るること

我に母母に祖母あり月涼し

耳揉んで長生きしたしサングラス

しゃぼん玉不惑の息を送り込む

坪内 稔典

あさつての落とし物かも朝の雉
どの窓も山へ開いて柏餅
粒あんの草餅憶良にもやろう
今ぼくは魚の末裔水温む
雲は春あのクロサイは君のはず
花は葉にクロサイはただ立ったまま
ついさつきホタルブクロを出た人か

鶴濱 節子

君はまだ磯巾着の夢の中
春愁が煙のように立っていた
手でちぎる恋の匂いの春キャベツ
気化するに時間たっぷり飛花落花
告白は雉の挨拶受けてから
桜蕊降るホッチキスの針がない
うっふんと天守を指すかたつむり

● 会員作品 ●

寺田 伸一

子子のテツガク跳ねて星踊る
春の雷しゃっくり止まるワニのアニ
ケツカレは「どうぞ」の心さくら餅
夏の海命はジツパヒトカラゲ
ペンギンの心は翅にこどもの日
春尽きて真つ赤は赤と違う空
愛なんて五月のカバさ、ああエレキ

田 彰子

路地裏に地蔵のいくつ燕来る
四月十日寺のココアの甘すぎる
山笑う違う形のイヤリング
トーストの端をかじれば桜咲く
桜蕊降る洗剤のきれている
南風投げ出す大きな左足
箱庭の土の人形よくしゃべる

長沼 佐智

混沌という名の春だモカ一杯
春の蚊の感違いでここに居る
前うしる分らぬ服だ別れ霜
風薫る青年僧の飛ぶように
いびつだよでも好きなのよ金魚玉
信念のひとになるなる夏休み
両口スパナぽんと投げ出す夏館

中原 幸子

春の宵逃げ足のふと美しき
花仰ぐこと失恋をなぞること
四月一日トイレにトイレットペーパー
たんぽぽの絮それからの四面楚歌
かしわもち弟どもは遠く住み
竹の秋きつちりかつちり靴の紐
ぎゅつと押す三文判や青嵐

● 会員作品 ●

梨地 ことこ

春の雷葉先のしづくへペリカンへ
俱利伽羅もするつとぬけて春の水
春キャベツ二つに切るとよく笑う
いちのはつの肌色透けるゲストハウス
豆ごはん掛ける年数の平凡
柿若葉苦情処理して出たところ
中二階ひがな一日若葉と青葉

南北 佳昭

三月の相撲は宇良ら宇良宇良ら
春疾風くの字に曲がる古街道
爺ちゃんの初心者マーク夕桜
ゼッケン番号1は「小柳」青嵐
御陵を遠くに拝み天道虫
おん宿は花屋徳兵衛初虫
空き瓶の箱ガシャリ夏のノロノロ

阪野基道

カマキリのつぎつぎ孵って！！！！！！
むぎわら帽ぬいで頭蓋のよそよそし
汗噴いて嫌ないやあない感じ
とぼとぼと源氏すぐ飽き泳ぐかな
蚊柱のなかに声するおんな連れ
白南風や胎内仏は今夜じゃま
遠雷や水のくぼんで死者の声

東 英幸

停車中バスのお尻へ寒気団
猫柳付け爪をして猫になる
漱石のそれから花の雨となる
大楠の洞を覗けば春の鬼
納豆が糸引くように春の市電
この惑星赤子は春を握りしめ
春疾風額田王の胸に

● 会員作品 ●

火箱 ひろ

魚は氷に海豚は京の青空へ
少年らヒップホップで蹴る春野
春や春山羊ほど野菜食べ老後
春のバスはずむ私もあんぱんも
いま豚の乳のむ時間さくら東風
やむを得ず足で開け閉て春障子
春の夜を「森の凶鑑」の中歩く

陽山 道子

パイプ椅子三つ重ねて月おぼろ
風光るわたしはカモメそれから
青石のふるさとおもほゆ春の岸
花の雨崇廣堂の大屋根に
春の雷豆腐田楽十六本
斑鳩の雲雀となつてわたしたち
五月きてよく揺れている木の時間